The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「八雲」「芸術」
Author(s)	滝口, 明祥
Citation	太宰治スタディーズ. 2008, 2, p. 10-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97237
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

追悼文を読む

「八雲」「芸術」

滝口明祥

「八雲」「芸術」の二誌を発行していた八雲書店は、言うまでもなく太宰治の最初の全集の発行元でもある。「八雲」はもともと短歌雑誌だったのが一九四八年四月に「社会人の文芸誌」としてリニューアル刊行された。その「新編輯第一号」には太宰の『女類』が掲載されている。また、「芸術」も創刊号（一九四六・七）に太宰の「チヤンス」を掲載しており、二誌とも太宰との因縁は浅からぬものがあったと言えよう。

「八雲」（一九四八・七）は「太宰治追悼特集」を組み、豊島與志雄、亀井勝一郎、青柳瑞穂、伊馬春部、清水昆の五氏が執筆している。そのうち、亀井を除く四氏は基本的に生前の太宰との思い出を記しており、特にその死に対する評価を打ちだそうとはしていない。豊島「太宰治との一日」は太宰と「さっちゃん」（山崎富栄）が家に訪ねてきて一緒に酒を飲んだ話を書いている。文章の最後を「その旅立ちに、最後までさっちゃんが付き添っていてくれたことを、私はむしろ嬉しく思う」と結んでいるのは、山崎を悪し様に罵る文壇人が多かった中でやはり特筆に値するだろう。青柳「太宰君の思い出」は太宰を「僕の最も尊敬する友人の一人」としつつ、十五年前に太宰から「思い出」の雑誌掲載時の切り抜きが贈られてきた話や、井伏が太宰を家に連れてきたところ、太宰がスキ焼の牛肉だけを食べたのでその「礼儀知らず」に驚いた話などを述べている。そして戦後に会ったときには「太宰君は、しばらく会わないうちに、おそるべき世界に入っている」ようであり、最後に妻の告別式であったときも「いかにも苦しげな表情」であったとされ、死の影がちらついていたことが暗示されている。伊馬「悲劇名詞」は、熱海に一緒に旅行した際に太宰が物事を悲劇名詞と喜劇名詞に区分していたことや、ラジオドラマ化された「春の枯葉」の演出を担当したときの思い出など。『斜陽』の中で上原が俳優に質問される場面は、実際に「春の枯葉」の出演者が太宰に質問したのを基としているとする。清水「似顔絵」は、生前の太宰とただ一度だけ会った際の思い出を記す。「文学界」の「同人巡礼」欄を書くために太宰を訪ね、顔をスケッチしようとしたところ、嫌がられ、代わりに一緒に酒を飲みに行ったのだと言う。もっとも、清水はその後で印象を基にスケッチを描き、それが雑誌に掲載されたらしい。以上の四人とは違い、亀井「愛情と奉仕」は生前の太宰の思い出に触れることはほとんどなく、太宰の作品には「強烈な反逆であり反俗」とともに「市民への奉仕」があったと語る。そして今回の死は、彼の「自虐」の完成であるとするのである。執筆者の五人は全て生前の太

宰と面識があったものの、格別親しい人たちばかりというわけでもない。作家（豊島）、評論家（亀井）、詩人（青柳）、演出家（伊馬）、漫画家（清水）と多彩なラインナップを重視したことが見て取れる。

一方、「芸術」（一九四八・八）の特集「太宰治の死」は実に対照的な編集方針と言えるだろう。執筆陣を眺めると、なかの・しげはる（中野重治）、平林たい子、小田切秀雄、竹山道雄、平野謙、埴谷雄高という著しく偏ったラインナップとなっているが、それはひとえに編集長であり、『太宰治全集』の担当編集者でもあった亀島貞夫のキャラクターに起因するように思われる。亀島は編集者であるとともに小説を執筆してもおり、「近代文学」の同人でもあったのである。執筆者は生前の太宰とは面識がない者がほとんどであり、「八雲」の特集が基本的に「友人」としての立場から思い出話を記していたのに対して、「芸術」は「読者」としての立場から時にかなり批判的な意見をも述べており、かなり客観的な評価を目指している文章が多いことも特徴と言えるだろう。「太宰は侵略戦争の提灯もちをしなかつた。この点をはつきりさせる必要があり、同時に、侵略戦争の提灯持をしなかつた精神・文学者としての生き方を、それを全幅的にのばせる時に来てなぜのばさず、自殺しさえしたかということをはつきりさせる必要があるだろう」とするのは、なかの「死なぬ方よし」である。なかのはまた、太宰は「人としていゝ人で、しじゆう共産主義、共産党、革命運動のことに頭を占領されていた」とも述べており、かなり好意的な面を見せる一方で、『斜陽』などの作品に対しては厳しく批判している。平林「脆弱な花」は、「あれだけの道化を生んだ太宰氏の高い孤独の理智を考へると空恐ろしくさへなる」としつつも、「太宰氏が一人で道化てゐるその姿から唯一者といつたやうな権威をふりかざしてゐる裏返しのヒロイズムを感じとるのは私だけかしら」とやや皮肉な眼差しも送る。もっとも、「戦争中に出た「文芸」といふ雑誌のある号をこないだ偶然にひろげたが氏が今もその頃も変らない態度で押し通してゐることが氏のある文章にはつきりと示されてゐ」たと評価しており、先述した中野の評価とは対照的であるとも言えるだろう。小田切「いやな気持」は、「好きな作家のひとりだつただけに、死ぬことによつて太宰が自身の芸術家としての恥部を自身の手でさらけ出すことがいやだつたのだ」と語る。太宰が戦後の「停滞」を打ち破ることなく死んでしまったことを「いまいましい」とさえ述べる小田切にとって、太宰への批判は文字通り愛情の裏返しであったのだろう。小田切は『新

郎』以降の戦時中の太宰の作品は「強いられた露骨な屈従」であったとするのだが、「終戦後まもなく、わたしは「惜別」と「お伽草子」を手に入れ、戦争末期近くには太宰がかえつて自己を恢復しはじめてゐたことを知つて或る感動を感じた」としているところは、なかのや平林の評価と併せて考えた場合、興味深い。竹山「義」は、太宰の世界像には「アクティブに構成する主体がない」のだが、「この空白は美しく、人を吸引する魅力をもつている」とする。太宰には「精神を支える信仰」も「積極的な意欲」もなく、「道徳」にも「美」にも頼ることが出来なかったのだとし、またその契機を左翼運動とその挫折に求めている。平野「人生の俳優」は他の執筆者の文章に比べてかなり短い。「太宰治の死が彼の文学の最後の仕上げだつたことはうたがへぬ。あなたは「人生の俳優」といふ陥穽にみちた道をみづから選び、その道に殉じた。傍人がなにをとやかくいふことがあらう」。客観的な評価というよりは文字通りの哀悼の文となっており、この特集の中では特異なものであると言える。埴谷「衡量器との闘ひ」は、「彼の死は確かに自殺に相違ないが、とともにやはり殺されたのだといつたやうな気分」が起こると言う。「自身が狂ひもなき正確な衡量器であつて識別こそされ識別されるものでないとの信念をもつてゐる」「人間鑑定家達」に取り囲まれているのが作家であり、太宰も「最後までさうした相手とばかり対坐しなければなら」なかったとするのである。また亀島自身も「悲劇名詞」という題で生前の太宰についての短いスケッチを記している他、編集後記で太宰の死をめぐる「軽薄なジヤーナリズムの煽情」を批判し、「不幸にもその飛躍を激動する時代の裡に闘ひとり得なかつた不幸な魂に対して香具師根性からの遣口が如何に非人間的な下劣さに充ちてゐるか、われわれはこれをジヤーナリズムの一員として明白に抗議したい」と述べている。亀島のそうした意図は、単なる思い出話とは一線を画した特集に充分に反映されているように思われる。

もちろん太宰に入れあげ、「軽薄なジヤーナリズムの煽動」を批判していたのは亀島一人ではない。「八雲」の編集後記においても、「二重作」という署名で、太宰に関する発言がしばしば掲載されていた。追悼特集が組まれた次の号（八月号）の編集後記には、「私は『死』の賛美者ではないが、精神的自刃をして肉体だけが生きているのは可笑しい。」「混乱また混乱のなかで太宰さんは立派だったと思う」という言葉が記されている。また、十月号の編集後記には、「次号は『太宰治未発表遺作特集』を予定し既に多角的な活

動を開始している。太宰氏に注ぐわれ〳〵の眼は、まだ曖昧で凝視が足りないのではないか。単にペシミズムと片づけ敗北文学と呼びなす前に、その思想の既往症を、若き日の氏のカルテに残っている作品から、もう一度深く見極め出していゝと思う。」とある。実際、「八雲」（一九四八・十一）は「太宰治未発表作品特集」を組み、習作や「斜陽」ノートなどを掲載しているのであり、編集後記ではやはり「二重作」の署名で「本号は太宰氏未発表作品の特集を試みた。氏が『人間不信』の灯りを生涯にかざしたことは、それがたとえ限界された『文学』の中ではあったが、混迷と空白のこの期に萬燈に代る一燈たる烈しい光芒を放つたものと思う。卑屈、道化、泣きごと、世に歪曲され誤解されている氏の『人間不信』の凡ゆるジェスチャアには生きる苦しみ、苦しむことの愛情が痛ましくも深々く裏付けられている—この真実をわれわれははっきりと知らなければならない」と述べられている。

ただし、亀島が自身を「ジヤーナリズムの一員」としていた通り、「八雲」「芸術」における特集が一九四八年四月に同社から刊行が開始されていた『太宰治全集』の宣伝としての機能を果たしていたことも事実だろう。野原一夫は「太宰治の心中はトップ記事として新聞に大きく報道され、社会的なセンセーションを捲き起こした。それは八雲書店にとって僥倖の〝朗報〟だったにちがいない」と指摘している（『含羞の人』一九八二・十、文藝春秋）。それまで『太宰治全集』は全十六巻の予定だったのが、急遽「書簡集」「未発表作品集」を加えて十八巻に増巻されることになったのも、そうした「太宰ブーム」を見越してのことだろう。だが、「太宰治の死という好条件に恵まれながら八雲書店版の全集はそれほど部数が伸びなかった」（野原前掲）ようで、八雲書店は一九四九年に倒産、『太宰治全集』も第十四回配本をもって中絶してしまったのであった。